

「あなたはどこにいるのか②」

創世記 第3章1節～13節
コリント人への第一の手紙 第13章12節～15節

説教 村上修平牧師

私達は祈る時、神様に色々な問いかけをします。辛い時には『神様、こんなことで困っています。どうしたらいいか教えてください』と祈ります。一方、神様も私達に問いかけ、語りかけておられるのです。しかし、私達はそれを無視して自分の願いだけを神様に聞いてもらおうとしていないのでしょうか。例えば友人が一方的に自分の話をし、こちらが話そうとした時に立ち去ってしまったら、自分は利用されているような不信感をもつのではないのでしょうか。だから、神様と私達が正しい関係を築くためには神様の言葉を真剣に聴くことが必要なのです。

今日、創世記を読みました。最初の人アダムとその妻が神様との約束を破ってしまった話です。この約束は神様と人との間に交わされた大事な約束でした。「善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」(創世記2章17節)。食べると死んでしまうから食べてはいけないと、言われたのです。しかし、人とその妻は蛇にそそのかされ神様との大事な約束を破ってしまいました。本来あるべき神様との親しい交わり、信頼関係を壊してしまったのです。その後、彼らは「園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した」(3章8節)のです。約束を破ったのなら、すぐに神様に謝るべきでした。しかし、人とその妻は主を恐れて身を隠しました。そして神に呼びかけられると、人は「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」(12節)と女のせいになります。(神様が)「わたしと一緒にしたあの女」のせいというのは、つまり『神様、あなたのせいです』ということです。しかし、夫に全く責任がなかったのでしょうか。約束を知りながら神を裏切ったのは夫も同じなのです。しかし、夫は自分が悪かったと認めないのです。

これは昔々のおとぎ話ではありません。現在の私達にも通じる、人間の罪の姿が示されています。神との関係がどのように壊れたかが描かれています。心を開いて相手を信じることができず、どこかで恐れ、自分の恥が見つからないように自分の殻に閉じこもっている、これは私達が抱える大きな大きな課題です。しかし、神様はこのような人間を、捜し「あなたはどこにいるのか」(9節)と呼びかけて下さいます。ところ

で、ここは大阪市西区の大阪教会ですが「どこにいるのか」というのは場所の話ではなく、霊的な次元の話です。あなたは恐れていないか、平安か、交わりから身を引いていないか、愛に満たされているか、ということです。そして、神様は、私と共に歩こう、そうすれば私の平安を与える、と呼びかけて下さっているのです。《平安》というものは、問題が何もないという意味ではありません。問題を抱えているただ中であっても感じられる安らぎのことです。呼びかけに応え神様と共に歩く時、悩みの中にあっても慰め、助け、平安が与えられるのです。

最初の人アダムは、神様との約束を破りました。人間なので失敗はあってもいいのです。しかし大事なのは、『神様、ごめんなさい』と神に立ち返ること、そして神様の『私と共に歩きなさい』という声を聞き、それに従うことです。神様は決して私達を見捨てません。人とその妻は約束を破り、食べれば死ぬだろうと言われていた実を食べましたが、神は人を死なせませんでした。罪を犯し、もはや園にいらなくなった彼らに、皮の衣をつけて送り出してくれたのです。ここに神の愛があります。

フィリップ・ヤンシーというクリスチャン・ジャーナリストが、東北の被災地を訪問した時、ある女性から『神様はなぜこんなことをしたのですか?』と問われました。彼は『答えは誰にもわかりません。でもイエス様は、愛する者を亡くし嘆く人々を深く憐れみ、一緒に涙を流してくださいました』と答えました。マルタとマリヤの弟ラザロが病気で死んだとき、イエス様が深く憐れみ、共に涙を流されたとき聖書は語ります。私自身、納得のいく答えは持っていませんが、『私達が知っているのは、一部分でしかない、今はわからなくてもその時、すなわち、イエス様が再臨される時には、私達が完全に知られているように、私達も完全に知るようになるのです』(コリント人への第一の手紙13章12節より)。今は納得できなくても、それでも言えることは、イエス様はいつも私達のそばにいて、最善をなして下さるよい神様だということです。そしてこのことをよく理解できたなら、私達はこれを必要としている方々に伝える使命を負っているのです。

(記 説教要約奉仕者)